◆西北官衙地区の調査―第94次

1　はじめに

この調査は、公民館建設に先立ち、橿原市醍醐町で実施したものである。調査面積は1,260㎡、調査期間は、1998年11月20日から1999年３月17日であった。

本調査区は藤原宮西北官衙地区にあたるが、これまでの周辺での調査では藤原宮期の遺構はあまり検出されておらず、むしろ平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構が多く検出されている。したがって、本調査でも、藤原宮期の遺構の確認とともに、平安時代末から鎌倉時代の遺構の確認を視野に入れた。

本調査区の基本層序は、上から新旧２時期の耕土、茶灰色砂質土、灰褐色砂質土（遺物を含む）、黄灰褐色粘質土または微砂（耕作溝検出可能面）と続き、その下に暗褐色粘質土および暗茶褐色砂質土がある。遺構検出は、おおむね暗褐色粘質土および暗茶褐色砂質土で行い、その標高は66.9～67.0mである。

2　検出遺構

本調査区（図３）で検出した遺構は、弥生時代～古墳時代、藤原宮期、平安時代末～鎌倉時代のおおむね３つの時代のものに分けられ、このうち平安時代末から鎌倉時代の遺構の密度が最も高い。以下、各時代の遺構をとりまとめておく。なお、遺構の時期は、基本的に出土遺物から推定した。

弥生時代～古墳時代の遺構

調査区の東部で南南東から北北西の方向に流れる弥生時代後期後半～古墳時代の流路（図２）を検出、また、調査区南東部で東西方向の流路を検出した。

SD8890　SD8891とSD8892に先行する南南東から北北西の方向の流路。底部付近には砂層が見られ、水が流れていた状況を示している。弥生時代後期後半の土器が出土しており、この時期に機能していたものと見られる。もともと調査区北部では広がっていたこの流路が徐々に埋まって、SD8891とSD8892のかたちとなり、さらにSD8891が最後まで流路としての姿を保ったのであろう。

SD8891　SD8890の東部を踏襲した流路。延長約25mを検出し、幅２～４mの屈曲した形状であるが、堆積土は、粘土ないし粘質土であり、比較的滞水していた状態が推定できる。出土する土器は基本的には布留式のものであり、この流路が古墳時代初頭まで存続していたことがわかる。

SD8892　SD8890の西部を踏襲した流路。幅１～２mで延長10m分を検出した。布留式もわずかに混じるものの庄内式の土器が多数を占めていることから、SD8890が徐々に埋まった後SD8891と併存し、その後SD8891よりも早い時期、おおむね弥生時代終末期に埋まったものと見られる。

SD8893　東からSD8891に流れ込んでいたと見られる浅い流路。

SD8895　幅２～３mで延長８mを検出した東西方向の流路。北側にやや溢れた状況が見られ、西端で南に折れ曲がる模様。人工的な溝の可能性があり、時期は弥生時代ないしは縄文時代にさかのぼる可能性もある。

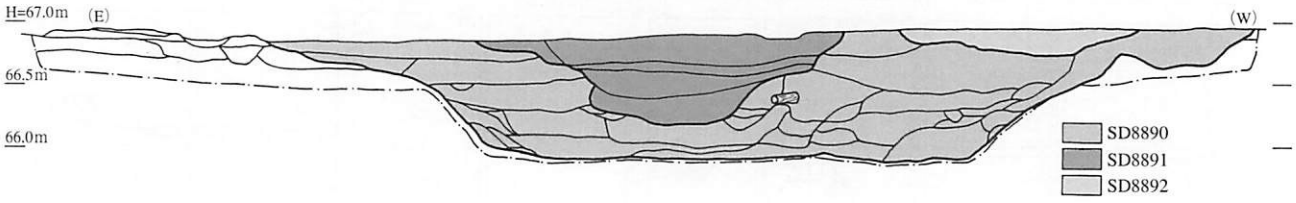

図2　SD8890・8891・8892断面図　1：60

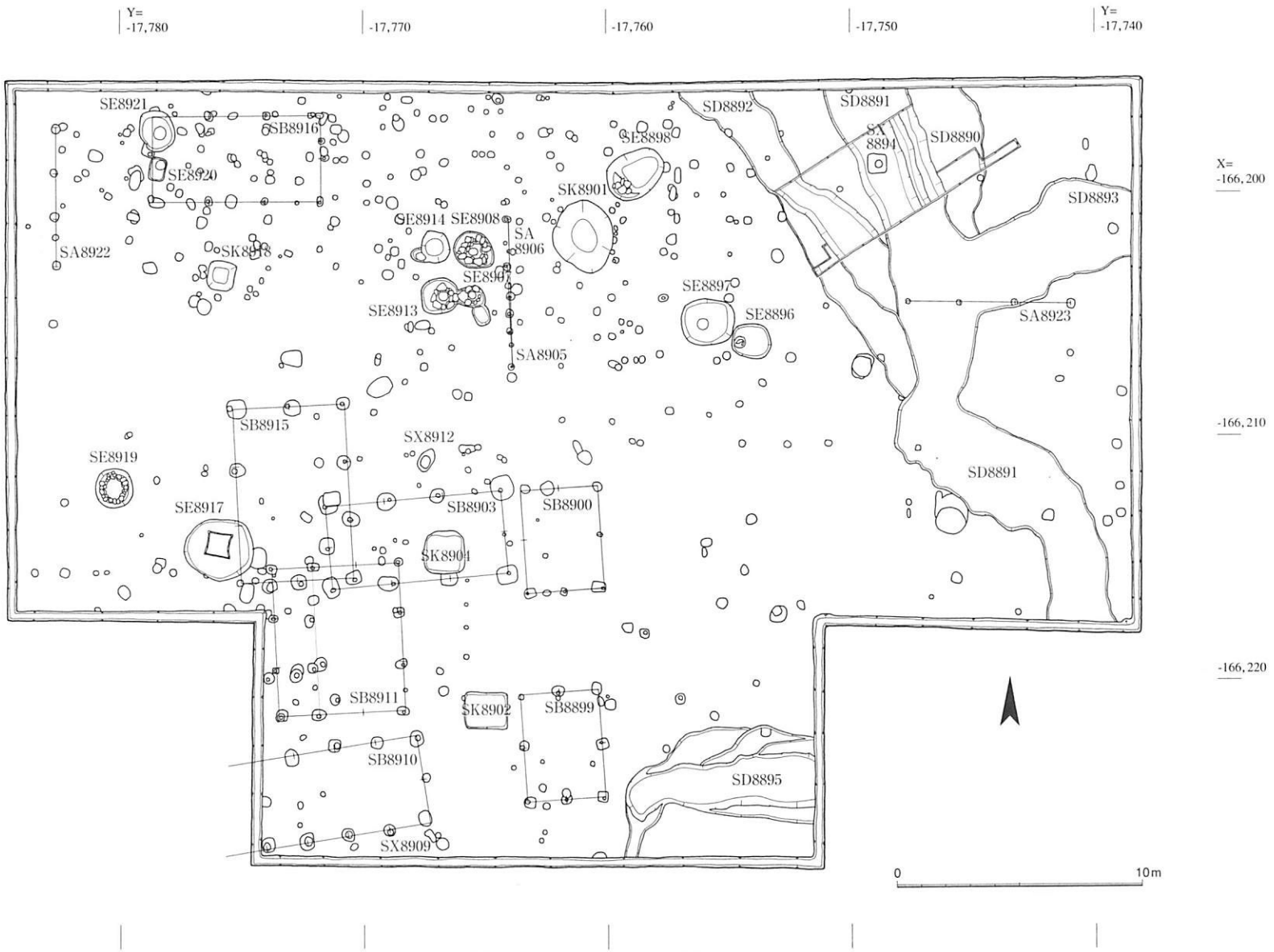

図3　第94次調査遺構図　1：250

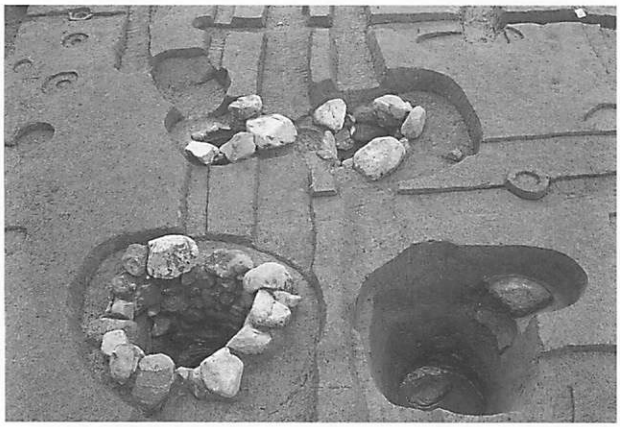

図4　4基まとまった井戸　SE8908ほか・北から

図5　曲物井戸SE8921

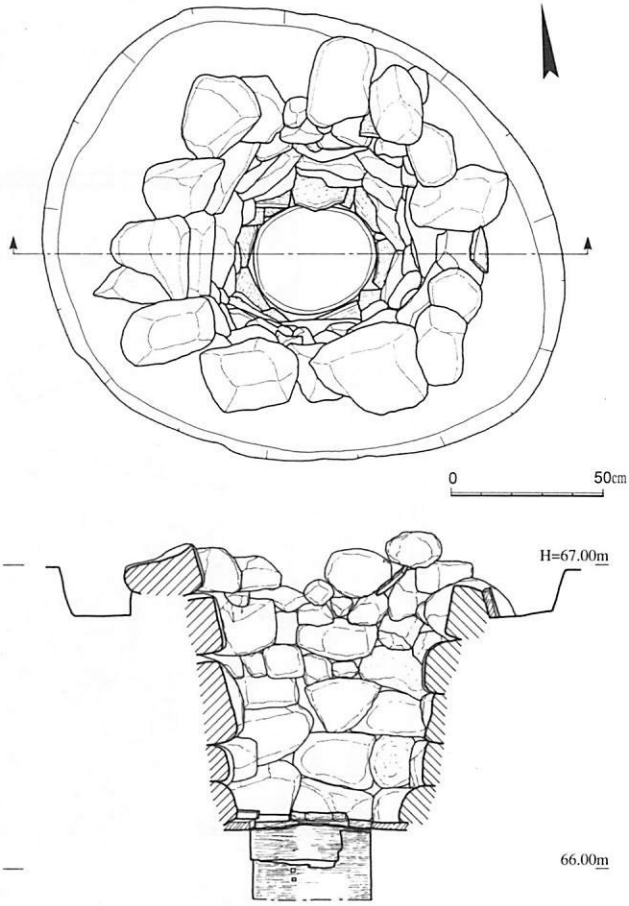

図6　SE8908平・断面図　1：25

藤原宮期の遺構

藤原宮期または藤原宮に先行する条坊の時期と推定できる遺構として、調査区中央北寄りで大きな土坑、同中央南寄りから西部にかけてで3棟の建物を検出した。

SK8901　長径3.0m、短径2.5m、深さ1.0mの楕円形の土坑。井戸の可能性もある。飛鳥Ⅴの土器が出土しており、確実に藤原宮期の遺構である。

SB8899　桁行2間（柱間2.2m）、梁間2間（同1.6m）の掘立柱南北棟建物。柱穴から飛鳥Ⅳ またはⅤの土師器が出土した。

SB8900　SB8899と全く同規模・同形式の建物。SB8899と東西方向にはわずかにずれているが、約4m北に平行して建っており、同時期に併存していたものと見られる。

SB8910　桁行5間（柱間1.75m）以上、梁間2間（同1.8m）の掘立柱東西棟建物。飛鳥Ⅳ またはⅤの土師器が出土。

平安時代末～鎌倉時代の遺構

平安時代末～鎌倉時代（12～13世紀前後）のものと考えられる遺構として、調査区東部と南部を除いた各部で検出した10基の井戸、同南西部の3棟の建物、同北西部の1棟の建物などがある。なお、本調査区の南方約50mの第75-12次調査で検出した環濠の一部と見られる南北溝は本調査区までは延びていないことを確認した。

SE8896　1.7×1.4mの隅丸長方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた井戸。曲物内に石が投棄されており、曲物上部に石組が組まれていたと見られる。なお、曲物にSE8897を起点とする竹管が連結しており、併存していたことがわかる。

SE8897　2.2×1.9mの隅丸長方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた井戸。曲物周辺に石の投棄があり、曲物上部に石組を備えていたと見られる。

SE8898　底に曲物を据えた石組の井戸。

SE8907　1.8×1.5mの楕円形の掘形を持ち、底に曲物

を据えた石組の井戸。なお、この井戸とSE8908・SE8913・SE8914の4基の井戸は、3m四方の範囲に隣接して掘られている（図4）。

SE8908　1.8×1.5mの楕円形の掘形を持ち、底に曲物を据えた石組の井戸。曲物の直径は40cmで、曲物の天端周囲を平坦にならして平瓦をドーナツ状に敷き詰め、そこから10～30cmの石を用いて円形の石組（残存高90cm）を組むという造りは、今回検出した井戸の中では最もていねいで、残存状況も良好である（図6）。

SE8913　1.5×1.5mの隅丸方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた石組の井戸。

SE8914　1.3×1.1mの不整円形の掘形を持つ井戸。石組や曲物は残存しない。

SE8919　直径1.6mの円形の掘形を持つ石組の井戸。底に大量の石が投棄されており、曲物は確認できなかった。

SE8920　1.0×0.7mの隅丸長方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた小規模な井戸。

SE8921　1.7×1.3mの楕円形の掘形を持ち、底に曲物を据えた井戸（図5）。曲物は直径38cm高さ27～28cmのものを3段重ね、その上に直径50cm高さ13cmのものを据えている。その上部の構造は、石組を備えた痕跡がないことから、木組の枠が考えられる。

SB8903　桁行3間（柱間2.4m）、梁間2間（同1.7m）の掘立柱東西棟建物。この建物とSB8911・SB8915は平面が重なることから時期を違えて建っていたものである。

SB8911　桁行3間（柱間2.0m）、梁間2間（同1.7m）に西庇のついた掘立柱南北棟建物。

SB8915　桁行3間（柱間2.4m）、梁間2間（同2.3m）の掘立柱南北棟建物。柱穴の一つから10世紀以降の土師器が出土しており、平安時代中期頃にさかのぼることも考えられる。

SB8916　桁行3間（柱間2.3m）、梁間2間（同1.75m）の掘立柱東西棟建物。SE8921に先行するものである。

SA8905　南北塀。3間（柱間1.4m）分を検出。4基の井戸（SE8907・SE8908・SE8913・SE8914）の東に接して作られている。SA8906とは連続する時期に作られたものと見られる（前後関係は不明）。

SA8906　南北塀。4間（柱間1.3m）分を検出。

このほか、SK8902、SK8904、SK8918の隅丸方形の土坑は、土取りの跡または井戸を掘りかけてやめた跡と見られる。また、調査区中央から北西部で検出した小穴の多数から瓦器が出土しており、この時期のものと見られる。これらの大半は、小規模な建物や塀の柱穴であったものであろう。

その他の時期・時期不明の遺構

その他の時期および時期の確定できない遺構は以下の通りである。

SE8917　調査区南西部で検出した井戸。直径2.8mの円形掘形を持ち、一辺1.4mの縦板組みの枠を据える。出土遺物から近世のものである。

SA8922　調査区西北部で3間（柱間1.9m）分検出した南北塀。検出面が高く、近世以降のものと見られる。

SX8894　調査区北東部SD8891の埋土上で検出した一辺90cmの方形掘形を持つ単独の柱穴。対応する柱穴がなく、性格は不明。形状から見て藤原宮期のものの可能性もある。

SX8909　調査区南端部中央部付近で検出した炉。わずかに焼土を残すのみで詳細は不明。すぐ西にも焼土範囲があり、これも炉と見られる。時期不明。

SX8912　調査区中央部付近で検出した炉。地面を浅く掘りくぼめた1.0×0.7mの楕円形の底を残すのみで上部構造は不明。

SA8923　調査区北東部で3間（柱間2.25m）分検出した東西塀。時期不明。　（小野健吉）

3　出土遺物

出土遺物は以下の通り。

土器　縄文時代から鎌倉時代にいたる時期の土器が出土している（図7）。

調査区内で検出された遺構には伴わないが、後期縄文土器が出土している（1～4）。

SD8890、SD8891、SD8892からは、弥生時代後半から布留式にかけての土器が出土した。特にSD8890では弥生時代後期の高坏、甕、壺が中心であり、SD8892では庄内式の高坏、甕、壺が、SD8891では布留式の甕と壺が多数を占める。

SK8901から藤原宮期の土器がまとまって出土している。土師器坏A、坏B（6）、坏C（5）、坏H、甕（7）、鍋、須恵器蓋（8）、坏A（9・10）、平瓶、甕、鉢A（11）がある。坏A（9）と鉢A（11）には内面に漆が付着して

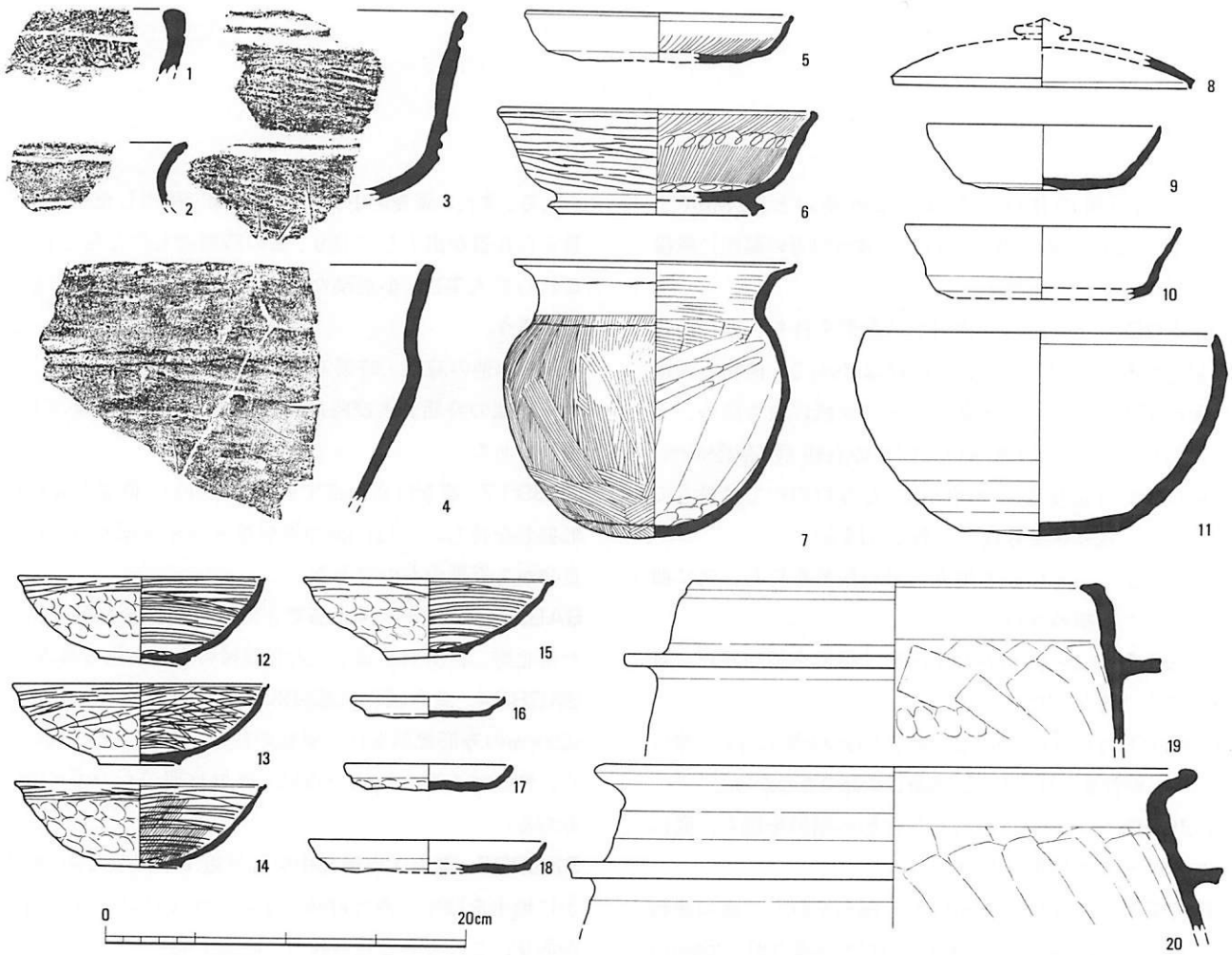

図7　第94次調査出土土器　1：4

いた。

12世紀後半から13世紀ごろに位置づけられる土器は、おもに井戸から出土している（12～20）。器種は、瓦器椀（12～15）、土師器小皿・皿（16～18）、瓦器羽釜（19・20）、摺鉢である。

瓦　軒丸瓦は6273C、6274Ab、6275A、6279B各1点、軒平瓦は6641C、6643Aaが各3点、6641E、6643C、6646A、6641、6646各1点がある。丸瓦は54点、13kg、平瓦が164点、31.8kg出土した。その他、熨斗瓦、塼、へら書きのある丸瓦がある。

木製品　中世の井戸9基で曲物を確認し、そのうち6基の井戸から遺存状態の良好であったものを中心に計10点の曲物をとりあげた。　（鈴木恵介）

4　まとめ

本調査区で検出した遺構のうち、藤原宮期と確定できるのは土坑SK8910だけであり、宮に先行する条坊の時期（天武朝）の可能性のある3棟の建物（SB8899・SB8900・SB8910）を含めても、藤原宮期の遺構は希薄である。これまでの周辺の調査でも、藤原宮期の遺構はきわめて希薄であり、本調査でもその傾向は変わらなかったと言えよう。その原因として、この一帯で後世に大規模な削平が行われたことが想定されているが、もともと藤原宮のなかで空閑地的な部分であった可能性も少なからずあるのではないだろうか。その理由は、高い地下水位に求められる。この調査区の東部でも弥生時代後期後半～古墳時代の流路が南南東から北北西方向に横切り、また平安時代末～鎌倉時代、さらに近世の井戸が非常に高密度で検出され、それらが現在でもかなり高い水位を見せている。万葉集の歌からも藤原宮周辺は池や湿地の多い場所であったことがうかがえるが、そのなかでも標高が低く地下水位の高い西北部はとくに殿舎建設に適さない場所だったのであろう（図8）。藤原宮に続く平城宮は奈良山丘陵南麓の支丘先端部に位置し、二つの尾根と谷からなる地形に立地するが、水位の高い谷筋には佐紀池・水上池を築造して園池としており、地形に即した土地利用がなされている。藤原宮では、存続期間が短かったこともあって、水位の高い場所でも、そうした園池築造はなさ

図8　調査区（矢印）および藤原宮跡　西北上空から

れず、空閑地的に残されたのではないだろうか。

次に、本調査区が最も高密度に利用されていた平安時代末から鎌倉時代の状況を見ると、井戸がきわめて多いことがその特徴としてあげられる。1,260㎡に10基（近世の井戸SE8917を除く）、井戸のない東部と南部を除けば750㎡に10基という高密度になり、しかも隣接して4基あるいは2基といった配置が目をひく。こうしたことから、これらの井戸は単に通常の生活に供されていたとみるよりも、むしろ水を使用する何らかの生業用と考える方が妥当かもしれない。いずれにせよ、建替えを伴う3棟の建物等の存在とも相俟って、この場所で生業を含めた生活が営まれていたことは確実である。本調査区の南方では、これまでの調査（藤原宮第27-6・63-2・66-3・66-4・75-12次）で複数の環濠居館の存在が想定されているが、本調査区内には環濠はなかった。しかし、上記のような生活空間を想定するとき、やはりこの場所も環濠に囲われていた可能性が大きいことが指摘できよう。それが居館なのか、あるいはもっと広い範囲を含む集落なのかは、今後の周辺の調査に待ちたい。

（小野健吉）

コラム：あ　す　か　ふ　じ　わ　ら　①

1998年度も発掘現場は4班編成で、調査を行った。前年度冬班も6月初旬まで稼働したが、本年度も飛鳥池遺跡をはじめ、重要遺跡での貴重な遺構・遺物の検出が相次ぎ、各班とも延長戦を強いられた。なお、第93次調査では瓦窯の調査のため、瓦整理室を中心に「飛鳥池瓦窯特別調査班」（1998.11.30～1999.1.18）が結成された。　（N）

表2　1998年度　現場班編成

	春	夏	秋	冬
調査員 ※：総担当 調査補助員	※安田龍太郎（考古第1） 深澤　芳樹（考古第1） 長尾　　充（遺構） 水戸部秀樹 渡邉　淳子（研修）	松村　恵司（考古第2） ※花谷　　浩（考古第1） 島田　敏男（遺構） 伊藤敬太郎 田福　　涼（研修）	※巽　淳一郎（遺構） 寺崎　保広（史料） 小澤　　毅（史料） 鈴木　恵介 渡邉　淳子	毛利光俊彦（史料） ※西口　壽生（考古第2） 小野　健吉（遺構） 村上　　隆（考古第2） 田福　　涼
調査期間と主な調査	1998.4.7.～7.31. 第87次（飛鳥池遺跡） 第90次（藤原京右八・一） 第92次（飛鳥池東方遺跡）	1998.6.11.～11.6. 第90次（藤原京右八・一） 第93次（飛鳥池遺跡）	1998.10.5.～1999.2.21. 第93次（飛鳥池遺跡） 第94次（藤原宮西北官衙）	1999.1.7.～5.7. 第94次（藤原宮西北官衙） 第95次（吉備池廃寺） 第96次（藤原宮西面南門） 第97次（飛鳥寺）

総括：部長　黒崎　　直　　写真担当：井上　直夫、中村　一郎／　保存科学：村上　　隆